
変格レルム 第一章

FRIDAY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変格レルム 第一章

【Nコード】

N2430M

【作者名】

FRIDAY

【あらすじ】

読みきり短編の方の作品の続き・・・。

自分のことを偽善者と称する彼女と
その他のナカマの物語。

プロローグ

夜波 カコはいつもどおりの下校をしていた。

茶髪がサラサラとなびき、美しさを引き立たせる。

喉が渴いたか、カコは自動販売機に立ち寄った。

120円を入れて、小型のウーロン茶のボタンを押そうとすると

プシュツ……！

自分の手とは違う何かがボタンを押した。

カコはその知っている腕を睨んだ。

カコ「トウマ……。」

トウマと呼ばれた少年は笑顔を見せる。

トウマ「お前ってやっぱりウーロン茶派？ここはやっぱり炭酸だろ？」

カコ「と、いいながらも私のウーロン茶飲んでるし。」

トウマはカコのウーロン茶のふたを開け、飲んでいた。

トウマが二口飲むとカコに返す。

カコ「いらぬわよ。間接キス入りだなんて……。」

トウマ「いいじゃん。まだ小学生だぜ？俺たち。」

カコ「レディに失礼よ。」

カコの口調からするに、トウマはカコの本性を知っているようだ。

トウマ「飲めって。お前の金だろ？」

カコ「いい。あげる。」

トウマ「じゃあ金返すからな。」

トウマはポケットを探る。

カコ「返さなくてもいい。あんたが飲んで。」

カコはトウマを一瞬一瞥すると茶髪をひるがえし、

家へ真っ直ぐ帰った。

そしてカコは家の玄関に駆け入る。

そして……

「大嫌い。」

カコはトウマの顔を思い出しながら誰もいないドアを覗んだ。

カコ「アリス・・・、また日本語と英語がゴチャゴチャだよ。」

カコは少し考えて息を吸う。

カコ「《ああー。今日は国語の授業がある。すごく難しいよね》。
《って言うのよ。》」

アリス「むずかしいね。」

アリスはケラケラ笑った。

カコはアリスと2人つきりになった。

半径1メートルには誰もいない。

カコ「わざとか・・・?」

カコの表情は暗い。

アリス「そうね。やっぱり日本に来て1年経ったもの。」

やはり妙なアクセントは変わっていない。

だが、日本語は達者だった。

カコは頭を押さえて溜息をつく。

カコ「私以外の友達を作ろうとは思わないの?」

アリス「いいのっ!」

アリスはカコを近距離で指差す。

アリス「私のBest my friendはあなただけよ。」

カコ「……………」

カコは無言で手を2回叩いた。

アリスの顔が和らぐ。

カコ「Do you stop it? I worry about you。」

(いい加減にしたら？私はあなたのことを心配しているのよ。

)

アリス「Thank you for worrying。」

(心配してくれてありがとう。)

アリスはニコツと笑った。

アリス「私のトモダチ？あなただけよ。」

カコ「……………」

アリスは怪しく笑う。

∴
)

アリス「I r r e r y . . .」
(頼りにしてるわ . . .)

米日ハーフのご令嬢！（後書き）

少し英語が多いですが、ご了承ください。。。

代わりのセンセイ

ある時カコ達の担任の佳代子先生が結婚した。

ある時カコ達の担任の佳代子先生が子どもを授かった。

ある時カコ達の担任の佳代子先生が産休を取った。

校長「君達の担任の佳代子先生が有難く子どもを授かりました。これから佳代子先生はお腹の赤ちゃんのために少し休まなければいけません。そしてその代わりに来た新しい先生を紹介します。」

ミヤキ「宮木です。よろしく願いします。」

すごく綺麗な先生だった。

〈教室〉

アリス「ねえねえ、新しい先生はヤサシーと思う？それともキビシ
ーと思う？」

カコ「前の先生は少し厳しかったけど、あの先生は優しそうよね。」

カコは天使子の顔でアリスと話す。

2人の会話にみんなが入ってきた。

「すごく綺麗だったよね。カコと並ぶんじゃない？」

カコ「大人と比べないでよ。」

「いやいや、比べてもあんたやっぱ綺麗だわ……。」

「そういえば佳代子先生の子ども、男の子らしいよ。」

「何でわかるの？」

「なんか占い師に聞いたらしいよ。」

アリス「ウラナイって信じる??？」

アリスはカコに笑いかける。

カコ「一応ね。」

カコは優しい太陽のような笑顔を見せた。

ガラツ・・・

教室のドアが開いた。

ミヤキ「はい、みんな座ってね。」

ミヤキ先生は黒板に自分の名前を書く。

ミヤキ「では、改めてよろしくお願ひしますっ。」

ミヤキ先生は頭を深く下げた。

ミヤキ先生は優しかった。

ミヤキ先生の授業は楽しかったし、おもしろかった。

みんながミヤキ先生を好きになっていった。

〈放課後〉

トウマ「新しい先生サイコーだな。」

カコ「なんで？」

トウマ「何よりも美人だ。お前も見習え。美人で優しいってすごく貴重だぞ？」

カコ「なんで見習わなきゃいけないの？そりゃあいい人なんだろうけど……。」

トウマは目を輝かせてカコを見る。

トウマ「お前が優しくなったら、俺はお前を嫁にもらってやってもいいぜ！」

カコ「いらない。（キツパリ）」

カコはあまりミヤキ先生を好きにはなれなかった。

幼いころに見たことがあるような気がしてならないからだ。

ミヤキ先生はいつも授業で混乱すると長い髪を触る癖がある。

それをカコはデジャヴで感じていた。

どこで見たのだろう。

あまり良い思い出ではない。

なんだか黒い霧の中に先生の姿を思い浮かべたかのようだった。

絶対的支配者

このクラスには学級委員長より権力を誇る男子がいた。

ミヤキ「にい・・・やま・・・君？新山 シンくん。」

まだみんなの名前を覚えきっていない先生は危ない口取りである男子の名前を呼ぶ。

シン「うあーい・・・。」

今は健康観察。

だるい感じで手を上げる男子。

髪はサラサラヘアーだが、眼光が強い男子だった。

彼はこのクラスのボス、言わば《支配者》である。

ミヤキ「えーつと次は・・・。」

ミヤキ先生は名簿を見る。

シン「ミヤキっ。」

すでに呼び捨て・・・。

シンは立ち上がった。

シン「やっぱり係を作ったほうがいいと思うぜ。先生はゆっくり覚えれば良いんだから。」

みんなは何も言わない。

尊敬の念さえ表している者さえもいる。

シンの言葉にはそれほど説得力があった。

ミヤキ「そうね……。じゃあ、お願いしようかしら?」

ミヤキ先生は戸惑いながらも周りを見渡す。

ミヤキ「じゃあカコさん、頼める?」

カコ「……!わ、私ですか?」

ミヤキ「ええ。」

カコ「あ、はい……。良いですよ。」

カコは天使の微笑で先生へ視線を返す。

ミヤキ「じゃあ一日だけお願いね。」

ミヤキ先生はホッと胸をなでおろした。

〈休み時間〉

アリス「よくがんばったあね。」

アリスはニコニコ笑顔を崩さないままカコに語りかける。

一方カコはご機嫌ナナメである。

ブスツとしながらカコは言う。

カコ「あの先生も先生だね。クラスの名簿くらい覚えたらいいのに。もう1週間以上経ったわよ？」

アリス「信頼されてるねー??？」

アリスはからかうようにカコの顔を覗いた。

カコ「あのさ……わざと??？」

〈放課後〉

シン「なあ。」

カコ「……?」

シンはカコに話しかける。

カコ「何？」

シン「あの……その……すまなかった。」

カコ「はあ？」

カコは次の瞬間に全部理解した。

シンは健康観察でカコに振られてしまったことを謝ろうとしている。

シン「あの時は先生を助けようとしたつもりだったんだけど、カコに迷惑かけたな……。」

シンの顔はどこか寂しげである。

シン「すまん……。」

カコ「……。」

カコはニツコリ笑った。

カコ「いいよっ！気にしてない！」

シン「……そうか。」

シンはそれだけ言っと帰っていった。

カコ「……まあ謝ったから許す。」

我らがクラスの絶対的な支配者は、

表向きはみんなの先頭に立つボスだが、

みんなに迷惑をかけると……

優しくなる。

ほんの時々だが……

カコは思った。

彼にはプライドがあると。

迷惑をかけられないというボスの意地があると・・・・・・・・。

我がクラスの絶対的支配者は

クラスで一番正義感が強い男子である。

2520日前

7年前。

ギリギリそこにはあなたがいたのに・・・。

「お母さん？」

私・・・

当時5歳。

お母さんは庭の草むしりをしている。

しかし午前中から始めて帰ってこないから

私は見に行った。

しかし庭には誰もいない。

5歳の私は怖くなって家の周りを涙を流しながら探し始めた。

まあ、その時・・・

お母さんは近所のおばさんと世間話をしていたのだが。

私は涙と鼻水で頭が変になりそうだった。

私は何を思ったか、家に帰り、

適当なチラシの裏の白紙にクレヨンでお母さんの似顔絵を描いた。

そしてそれを立て掛けやすい壁に飾った。

私はその時、葬式に飾るような写真のようにでもしたのだろうか？

それに手を合わせていた。

「おがあじゃん（おかあさん）……！」

死んでいないのにね。（笑）

そしてしばらくしてお母さんが帰ってきた。

そこでお母さんはびっくり。

だって私が泣いているものね。

私はお母さんに飛びついたっけ？

そしてお母さんはわけがわからず私を抱きしめて……。

そして私は後から壁に立て掛けておいたチラシ（お母さんの遺影）をクシャクシャにして捨てた。

それは今だから笑える一番古い記憶……。

そしてそれから数日後・・・。

私が幼稚園から帰ってきて、家のドアを開けたときのことだ・・・。

お母さんは料理中だったのだろうか？

フライパンとその中身が散乱している中に倒れていた。

「お母さんっっ!」

私は駆け寄った。

私の茶髪がお母さんの体に落ちる。

お母さんは冷たかった。

「お母さん・・・!」

ザツ・・・

「お母さん!!」

ザツ・・・

ザツ・・・

足音が聞こえた。

とても恐ろしく本当であれば、ありえない音。

そこにはボサボサの長い髪をなびかせる若い女の人立っていた。

女の人の手には何か紐のようなものがあった。

私はとっさにお母さんの首を見た。

何かに締め付けられた跡があった。

「えつつ……。」

私はもう一度女の人を見たが、女の方は逃げていった。

私は追いかけなかった。

いや、追いかけることができなかった。

5歳の頭では今の状況を理解することで精一杯だった。

そして1時間が経過し、5歳の私がとつた行動は、

110番に電話をすることだけだった。

運動会種目決め

新任女教師 ミヤキ先生はあることを黒板に書いている。

運動会の競技だ。

トウマ「なあなあ、何に出る？」

トウマは目を輝かせながらみんなと話している。

そのメンバーは次の通り。

・カコ

・トウマ

・アリス

・シン

・その他の男女

ミヤキ「みんなで話し合いをしてねー。みんなケンカしないように、納得する競技に出るよつたー！」

みんな「はい。」

トウマ「俺は楽な競技に出たいな！俺は障害走で！」

シン「おい、トウマ！俺だって障害走がいいっ！」

アリス「私は……あのー、ほら……ショートな……」

カコ「短距離？アリスは足速いモンね。」

アリス「カコ何する？」

カコは天使の微笑で黒板を見る。

カコ「私は長距離でいいわ。体力には自信があるもの！」

みんな「さすが天使子……！」

みんなが尊敬の念をこめてカコを見た。

くそしてチャイムく

ミヤキ「みなさん決まったようですね！では運動会はがんばってください！」

く放課後 通学路く

トウマ「さすがは天使子様！長距離をお選びになられるとは慈悲深い……。」

トウマが芝居かかった口調でカコに拝む。

カコ「だって誰も長距離やらないじゃない？だから私がやるしかないのよ。」

トウマ「そういえばアリスって足速かったっけ？」

カコ「……速いわよ。」

トウマ「何で俺知らないんだっけ？」

カコ「……あんだ確か体育の時間、保健室に行ってるわよね？い・つ・も！」

トウマ「それを言われちゃあお終いだ！」

トウマは惚けたように笑って分かれ道を進む。

ここでトウマとカコは別れるのだ。

トウマ「じゃあな！天使子様！」

カコ「うるさい黙れ殺すぞ。」

トウマ「やだ、こわい。」

カコ「キモい。」

カコはそう吐き捨てて家にダッシュして帰る。

カコ「やっぱあいつ大嫌い大嫌い大嫌い！だーい嫌いっ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2430m/>

変格レルム 第一章

2010年10月10日01時39分発行